部局化をめぐる対話

生物生産学部
食品科学講座
佐藤清隆

U　やあ、B君、忙しそうだね。

B　ええ、大学院再編論議に巻きこまれて大変です。

U　そうだってね。「部局化」を軸に、自然科学系の学部・大学院組織の改編が委員会で審議されているんだって？　もうすぐ停年の私でさえ気になるんだから、若い君達は真剣だろう。

B　そこで先生のご意見をお伺いにきました。

U　ではその「部局化」から説明してください。

B　簡単にいうと、教官の本務を、学部教育から大学院の教育・研究に移し、大学院を教育・研究一体の組織として「部局」とするのです。

U　すると、今の学部はどうなるの？

B　学生の教育専門組織となります。

U　学部の入試はできるの？

B　そのはずです。

U　ははあ、例の東大などの試みを、広大でもやろうというわけだ。たしかに、「限られた予算」それも「重点配分」というバイアス下で、上からは学術研究のレベルアップを求められ、遠くを見ると将来の学生人口の急減が見えている。「生き残り」をかけた試練の中で、「大学院重点化」によって予算の充実、優秀な学生の確保やスタッフのレベルアップを図ろうとする気持ちは、痛いほどよくわかる。「部局化」の蜘蛛の糸につかまりたいというね。

それで、部局化したいのはどの大学院？

B　先生、待ってください。具体的構想はまだ検討中です。けれども、全体の部局化が基本で、改編の枠組みとして、分野別の研究科群ないしは融合・一本化が検討されています。

U　学部と研究科がほぼ対応した今の枠組みを、取り壊して再編するわけか。まてよ？　東大などは、学部をそのまま持ち上げただけでしょ？　それを本学ではできないの？

B　どの大学も似通った「部局化」を考えているので、独自性を出す必要があるのです。

U　それはわかるが、本当に研究・教育が直結した大学院の重点化の目的が研究重視というのなら、研究分野の専門性が不鮮明にならないようにくれぐれも慎重にやってください。大学院組織の枠組みは非常に大事です。ところで、「大学院重視」が「学部軽視」につながることにならないのかな？

B　といいますと？

U　だって、学部教授会が自治の単位でなくなり、大学院の基準で教官の採用や昇進が決まるのだから、学部教育の手抜きが意識の上でも現実としても起こるでしょう。

B　私としてはそうならないように希望しています。しかし、一方で「学部」をやめて「大学院」だけにする考えもあるでしょう。

U　その場合は、日本全体の規模で、現状の体制が大学院だけの大学と学部だけの大学とに分離する形に移行しないと、運営できないでしょう。しかし、そういう大学の風景は惨めで、御免被るね。それにそうなりっこない。たとえば、百年以上も続いている伝統大学が、学士教育を放棄するはずがない。大学院を手放す場合も同じだ。

B　「よほどのことがない限り」、でしょうね。

U　それは論外として、きみの考えている「部局化」でも学部教育の心配は残るね。

私の考えが古いのかもしれないが、大学における教育の根幹は、人類が蓄積してきた知的遺産を次の世代に伝えることにあり、そのために教養・専門を系統だてて伝授することです。さらに進んで、大学院の教育は、高度に発達した最前線の研究の営みと直結した専門教育を経て、最終的には誰も踏み込んだことのない領域を開拓するところまで導く。それぞれの段階で優秀な人材を世に送り出す任務がある。

本当に、我々がそれぞれの教育を融合させることを放棄してよいのかどうか。特に、私たちのような応用分野は、高校までの教育にはない教育内容、たとえば課題意識の養成とか対象への具体認識などが、基礎的な自然科学に加えて必要です。それに裏付けられた教育がないと、高度な専門教育や研究は成り立たない。

繰り返しますが、きちんとした責任体制のもとで学部教育が行われないと、「大学院は立派、学部教育はいい加減」となって自滅しかねない。そこをよく考えてください。

B　分かりました。

プロフィール

（さとう・きよたか）
◇専門は生体・食品の分子特性に関する物理解析
◇専門委員会委員